

如浄禅師示寂の周辺

佐藤 秀孝

今日、道元禅師（一一〇〇—一五三）の本師である天童山の如浄は南宋の隆興元年（一一六三）に生まれ、紹定元年（一二三二）に示寂したということではほぼ定説化しており、これまでその定説に対して異議を申し述べた人はほとんどなかったようである。しかし、詳細にしらべていくと、如浄の示寂年時には三説が存しているのであり、当然、その生年も三説が生じることになる。まずその三説を挙げてみよう。

第一には面山瑞方（一一六八—一七六九）の『如浄禅師行録』に「乃大宋紹定元年戊子七月十有七日矣（丁日本安貞二年也）」と記される紹定元年示寂説であり、この説がこれまでまったく無批判に依用されてきている。しかるに古伝は一樣に紹定元年示寂を伝えないのである。ただ古伝にも二説が存している。すなわち第二の説として瑩山禅師（一二六八—一二五）の『洞谷記』に「天童浄和尚、大宋紹定二年己丑七月十七日逝。日本寛喜元年。今至三元亨三年九十五年也。」とあり、紹定二年（一二三二）示寂説が存するのであり、これは

瞎道本光（一一七一—一七三）の『永平広録点茶湯』卷一〇の「天童和尚忌上堂」にも見い出せる。第三には延宝本以外の古写本『建撕記』が伝える「大宋宝慶三年七月十七日示寂」という宝慶三年（一二二七）示寂説であり、これは寂円（一二〇七—一九九）の系統（寂円派）の伝承であつたらしく、『越前宝慶由緒記』もこれを受ける。ただ、いずれの資料も如浄の示寂の月日を七月一日とすることは一致し、また『如浄語録』の「遺偈」よりして六六歳示寂も動かないであらう。

では、いったい三説の中でいずれがもっとも妥当なのであろうか。とりわけ注目すべきは面山以前に紹定元年示寂をいう資料は見当たらず、面山が何の資料によってこれを定めたかがはなはだ疑問なことである。まして面山は如浄の生年をも隆興元年七月七日と明確に規定しており、他の詳しい伝記が不明な如浄であるだけにその依るところが定かでない。また『洞谷記』にいう紹定二年示寂説も、如浄を慕うことこの上ない瑩山禅師であるだけに、明確に年時を逆算しているの

は一考の余地が存するかもしれないが、いまは諸般の客観的事情からしてこの説は史的には成り立たないであろう。

結論を先にいうなら、如浄の寂年は従来いわれる紹定元年ではなく、その前年の宝慶三年であったとみるべきであり、当然、その生年も紹興三二年であったと考えるわけである。以下、その理由を考察しておきたい。

古写本『建撕記』や『宝慶由緒記』は後代の、しかも日本撰述の資料であるから、なお疑問の余地も存しようが、宝慶三年示寂説を裏付けるもつとも重要な資料は、如浄が示寂に臨んで遺書を呈した無準師範（一一七七一—一二四九）の語録である。すなわち師範の『仏鑑禅師語録』卷一「住慶元府阿育王山広利禅寺語録」に「前住天童浄和尚遺書至上堂」が収められている。これを従来は如浄の紹定元年示寂説をうのみにして、紹定元年七月のこととしていたのであるが、師範の語録を点検してみると、まったく年代順に上堂語が配列されていることが知られ、この上堂が宝慶三年の解制上堂のつぎに為されていることがわかる。これは師範の初開堂より換算しても、また紹定五年（一二三三）八月に径山に勅住する以前に六年間、阿育王山に住していたことが確実であることから動かない。師範は嘉定一三年（一二二〇）三月に慶元府の清涼寺に入寺、同一六年春には鎮江府の焦山に、さらに同年の秋か冬には慶元府の雪竇山に遷り、ついで宝慶三年の春から夏

の頃に阿育王山に入寺しているのであり、入寺後、その年の解制後に如浄の遺書が届けられているのである。したがって師範の語録に依るかぎり、如浄は宝慶三年七月一七日に示寂したとみざるを得ないのである。

では、宝慶三年説が妥当であるのか。一つの決めては、
○我三十余年、与レ時功夫辨道、未嘗生_レ退。今年六十五歳、至_レ老弥堅。
（『宝慶記』）

○某甲今年六十五載、老骨頭懶、不会坐禅ナレトモ、十方兄弟ヲアハレムニヨリテ、住持山門、曉諭方来、為衆伝道ナリ。
（『正法眼藏』「行持」）

として如浄自身が語る「六十五歳」がいつの時点か、その解釈であろう。これは内容からして如浄が退院する以前のことであり、かりに宝慶三年のことであるなら、紹定元年説を裏付けることになるからである。これには道元禅師が天童山を去って帰国する時期も問題となるが、何よりも『宝慶記』の編成が問題となる。この点はたとえば『正法眼藏随聞記』が孤雲懷奘（一一九八—一二八〇）が道元禅師に参学してから一応の見解ができるようになるまでの期間の筆記録であるというのと同様に、『宝慶記』もまた記事の内容からして、あくまで道元禅師が宝慶元年七月に如浄に見えてから身心脱落あるいは伝法嗣法に到るまでの比較的初期に両者の間に交された問答集とみるのが妥当であろうし、また「行持」の巻に

いうところも如淨の六五歳の時の普説のメモに基づくものであって、これが明確に道元禪師帰国の年に為されたものとはいえないのである。ならばなぜ六六歳の時のことを持ち出さなかったかということになるが、道元禪師としては晩年の老いと疾で思うにまかせない如淨の姿を持ち出して門下に説くことは、正法禪の挙揚の上ではマイナスとなるとみただけではなからうか。意気盛んな六五歳の如淨こそ相応しいものであり、道元禪師にとって如淨はつねに古仏でなければならなかったといえよう。『如淨語録』の編成からしても、如淨は宝慶二年（一二二六）の冬には天童山を退院しており、道元禪師が記すのも如淨が住持として公に化導を為していた時点、すなわち宝慶二年でのものとみられるのである。もちろん前住位になっていたとはいえず、後席を継ぐ枯禪自鏡の入寺が如淨寂後であることから、実質的には如淨がそれまで天童一山を取り仕切っていたことは認めねばならない。

さらに宝慶三年示寂説を裏付けるものに『如淨語録』の編集刊行がある。かりに如淨が紹定元年七月一七日に示寂したのであれば、その語録の跋文をわずか一カ月後の八月一日にすでに天衣寺の嘯巖文蔚が撰しているのはきわめて不自然である。少なくとも示寂後の葬儀万般を含めた後事を経て語録の編集整理が開始されるまでに数カ月、編集整理が済むのに数カ月、さらに序跋の依頼者を決めたりするのにも時間を

費したであろうから、やはり文蔚の跋文まで一年余を経たとみるべきであろう。しかも如淨の後席を継いだ自鏡は、天童山入寺後、比較的早くに示寂したらしく、如淨の門人たちは自鏡の亡き後、如淨が杜撰の長老として嫌った次の天童山の住持晦巖大光に序跋を依頼することはなかったのである。また『如淨語録』はおそらく天童山ではなく靈隠寺にて開版されたのではなからうか。如淨の生地ゆかりの天衣寺の住持文蔚に紹定元年八月に跋文を得、開版の地靈隠寺の住持高原祖泉（？—一二二九）に同年一〇月に同じく跋文を得、また語録の校勘をも得て、如淨と同郷の友であった呂瀾に紹定二年に序文を依頼し、同年六月に門人の広宗が募刻したことになる。ちなみに祖泉の示寂は紹定二年三月頃とみられ、募刻の時にはすでに靈隠寺の住持は如淨と親しかった笑翁妙堪（一二七七—一二四八）であったらしく、かつて如淨に参學した虚堂智愚（一一八五—一二六九）や太虚徳雲（一二〇〇—一五〇〇）らがその会下に投じている。

このように古い伝承や当時の諸般の事情は、ともに宝慶三年七月一七日をもって如淨が示寂したとすることでほぼ一致しているとみてよい。そこでつぎに宝慶三年示寂説が決定的となることによって生じてくる諸問題を考察してみたい。

まずは如淨の伝記が一年づつ繰り上がることである。すなわちその出生は面山のいうごとき隆興元年（一二六三）でも、

まして七月七日でもなく、その前年の紹興三二年（一一六二）であつたことになり、一九歳で禪門に投じたのも淳熙七年（一一八〇）のこと、また雪竇山の足庵智鑑（一一〇五—九二）への参学期間の可能性も従来より一歳動き二三歳から三一歳までの間、清凉寺へ開堂した嘉定三年（一二二〇）も四九歳の時となる。まさに如浄伝の全般的修正が必要となるのである。また無準師範も語録よりして淳熙四年（一一七七）から淳祐九年（一二四九）までの生涯であつて、その雪竇山や阿育王山の住持期間における如浄との関わりが改めて問われよう。

さらに、もっとも重要なのは、道元禪師の帰国年時が如浄の示寂年時の改正によつて微妙に動いてくることが挙げられる。禪師の帰国年時に關してもやはり古伝と面山説などとにかくの相違がみられるのであり、従来は後代の面山の『訂補建撕記』によつて道元禪師は宝慶三年の冬に船で中国を發ち、その年の中に肥後川尻に着いたとする説や、同じ面山のいう『永平実録』での安貞二年（一二二八）正月の帰国であるとする説などが優先していた。ただこれらの説はすでに大久保道舟氏らによつて退けられており、安貞元年（一二二七）八月に道元禪師は日本に向けて帰国の途に着いたとされるのである。面山はおそらく『弁道話』のいう「大宋紹定のはじめ、本郷にかえりし」の一文にこだわつて改変したのであらうが、宝慶三年を道元禪師の帰国年時とするのは古伝が一樣

に伝えており動かない。ところが實際は八月よりさらに早かつたのであり、延宝本を除く古写本『建撕記』の諸本は、いずれも道元禪師が日本に辿り着いたのを宝慶三年の秋としており、とくに瑞長本は八月には日本に帰着したと記している。これによるなら、道元禪師は七月かそれ以前には天童山の如浄の下を辞していることになる。この点、『宝慶由緒記』では、宝慶三年七月一七日以前にすでに道元禪師は如浄が老衰してそう長くはないことを知りながらも帰国の途に着いたと記しており、まもなく如浄が示寂し、翌年に寂円が来日したとするのである。この説が正しいとみられるのは、肥後の川尻に着いた道元禪師が同年一〇月五日には京都建仁寺にて『舍利相伝記』を撰していること、また「普勸坐禅儀撰述由来」にやはり嘉禄年中（一二二五—二七）に日本に帰つたと記していること、および『伝光録』でも道元禪師が安貞元年中に建仁寺に到つたと記していることなどによつても傍証される。これら古い資料が正しいのであれば、道元禪師は如浄の示寂を察知しながらも帰国したことになる。さすれば、国王大臣に近づく、深山窮處に住せよ、という如浄の訓戒は、道元禪師との決別の上に、さらに如浄自ら示寂を目にしたすさまじいことばであつたことになる。季節風や商船の都合などもあつたにせよ、道元禪師はその正師と仰いだ如浄の示寂もないことをあらかじめ知りながら、その最期を看取る

こともなく、あえて仏法挙揚のためにその下を去って日本に戻ったものといえよう。それはあたかも中国にて客死した仏樹房明全（一一八四—一二二五）がその受業師たる明融阿闍梨（？—一二三三？）の示寂を目前にしながら、それをふりきって仏法のために入宋したと語る『正法眼藏隨聞記』の記事を彷彿とさせるものであり、道元禪師の厳しい求道と正法宣揚の眼をもつての切実な重みが感じられる。明融と明全との関わりは、そのまま裏に古仏如浄と道元禪師自らとの間の緊迫した師資關係をも語るものであったといえよう。

さらに如浄の示寂が宝慶三年であるならば寂円の来日も定まってくる。従来の寂円伝では『宝慶由緒記』の記述が面山の道元禪師伝と相違することから、記述の誤りとして一年遅らせて来日したものと解していたわけであるが、これもやはり後代の如浄の示寂年時や道元禪師の帰国年時の改変に基づくものであって、『宝慶由緒記』にいう安貞二年の来日が正しいことになろう。寂円にとって如浄亡き後、知己たる道元禪師に参学することが第一の急務であったというべきか。宝慶寺という寺号も、単に道元禪師や寂円自身が如浄に参学した時期に因むというだけでなく、如浄の最晩年にその会下に在った寂円が、宝慶三年七月に如浄の最期を看取った時のいしれぬ哀愁を背景に名付けられたものではなかったか。そしてまた如浄示寂の波及は仁治三年（一二四二）の『如浄語

録』の到来を契機として道元禪師の脳裏にのみがえる。道元禪師の北越入山に及ぼす如浄の影である。『如浄語録』の到来によって道元禪師は再び如浄の古道に触れるのであり、如浄の決別の訓戒が改めて自己の中に問われたのである。波多野義重の勧める越前に如浄の生地越州をだぶらせ、また如浄の忌日を意識に入れた行動をとるなど、道元禪師の北越入山の背景には多く如浄に結びつく一面が存するのである。宝慶三年説によるなら、入越の年はまさに如浄寂後一七年のことである。もちろん道元禪師が京都を去る背景には外的要因もいろいろ存したのであるが、如浄示寂の波紋こそは道元禪師をして永平寺を開創させ、その後半生を決定的なものとした第一の要因であったといえるのではなからうか。

以上、如浄の示寂年時を古伝その他の資料に基づいて宝慶三年に訂正すべき旨を述べてきたが、今後、この宝慶三年示寂説から派生してくる如浄および道元禪師の伝記に関するより詳細な考察が必要となろうし、修正を迫られる箇所も多いといえる。わずか一年の相違ではあるが、これによって如浄と道元禪師との師資關係の厳峻さと親密さが改めて窺われるわけであり、如浄の晩年がまさに道元禪師一人の育成のために費やされた感がいまさらに迫ってくるのである。道元禪師の生涯と思想を考える上でも如浄示寂の真相は重要なポイントといえるであろう。

〔註略〕（曹洞宗宗学研究所所員）